

特集 中教審第一次答申を読む——学校五日制

## 中教審第一次答申と学校五日制

——めざすべき教育改革を考えながら——

手労研前事務局長 森 下 一 期

「学校五日制」を手労研としてはどう考えたらいいか……そのポイントは……。

中教審第一次答申が昨年7月に出されたとき、各新聞は完全学校週五日制について「21世紀初頭を目途にその実施を目指す」と日程が盛り込まれたことを大きく報道しました。審議のまとめには時期は明記されていませんでしたが、答申には「完全学校週五日制の実施は、教育改革の一環であり、今後の望ましい教育を実現していくきっかけとなるのとして積極的にとらえる観点から」として日程の目途も示しました。この答申がどこまで子どもたちのことを考えてなされたのか、地域や家庭の教育ということを謳い上げてはいるけれども、その陰にちらつく教育産業などのいわゆる「教育の自由化」の問題性は種々指摘されているところです。そのあたりのところについては、手労研の会員でもあった増山均さんが雑誌『教育』1996年10月号に「『学校五日制完全実施』のねらいとゆくえ」として論じています。

このテーマを与えられてかなりの期間構想を練ったのですが、中教審第一次答申を正面に据えて論じるにはすでに増山さんたちの分析もあるし、少々遅きに失したという感をもちました。

そこで、答申にある「教育改革の一環」としての学校五日制を私なりに考えてみようと思いました。

### 1. 本当に子どもの視点に立っているのか

そのまえに、次の言葉は誰が発したと思いますか？

「なぜなら、これまでずっと効率ばかりを追い求める教育を続けてきた結果、確かに多くの人材を養成し、高度経済成長社会を支えることができましたが、ふと気づいてみると、子どもたちはなぜ勉強をするのかわからない、学ぶ楽しさがわからないという状況追い込まれていたのです。」

さっと読んでしまうと、教育の現状を真に憂えた人の言葉のように思えます。これは、文部省高等教育局医学教育課長寺脇研氏の著書『動き始めた教育改革』（1997. 1. 1 主婦の友社刊）の一文です。この本の帯には「学校はどうなる？受験はどうなる？これは現役文部官僚からの情報公開だ！」とあります。その言葉に違わないような痛烈な偏差値教育批判が随所に書かれています。ラサールで受けた受験教育を反面教師として今現在文部省の内側で教育改革を考えている、という論調は見事だと思います。（寺脇氏は私たちに関心を持っている労働の教育に関わる「総合学科」——従来の普通科、職業科という入試の際に選ばねばならなかった二つの高校種別に、新たに制度化された、入学してから自分の進みたいコースを選択できる第三の高校種別——を生み出した立て役者といわれています）

にもかかわらず、中教審第一次答申に対する批判と同様、先に引用した一文が示すような教育の状況がどうして生まれたか、その責任は誰にあるのか、という点についてはいっさい言及がありません。

それとともに、寺脇氏の著書の中に全くふれられていないのが、生徒・父母の学校参加の問題です。PTAの文字がないわけではありませんが、どのように父母が学校に関わるか、といった論の展開は見事なほどありません。やはり、答申も同様です。「PTA活動の活性化への期待」の項目はありながら、欧米で一般的になっている、父母参加の法制化についてはもちろん、学校の中で父母がどのように位置づくかさえふれられていません。ましてや、児童生徒が主体的に自ら受ける教育、そして学校に関わるかなど一言一句ありません。

## 2. 教育改革の根ざすべきところは

学校五日制は、答申も記述しているように、教育改革の一環です。いや、そこを出発点に真の教育改革に進む入り口になり得るのではないと思うのです。その原点は、子どもが生活している現実、その子どもの生活はこれでよいのか、という問いかけであるべきでしょう。その象徴的な言葉として使われているのが「ゆとり」なのでしょう。この言葉をこれから一層子どもたちを管理するための甘言とするなら、許し難いことです。ここで、「管理」ということについて考えなければならないように思います。いわゆる「管理主義」という言葉で表される規則づくめの縛りをかけるのはもうはやらないでしょう(未だにそこにしがみついている学校もあるでしょう)。

それよりも警戒したいのは、適切な言葉かどうかわかりませんが“柔らかな管理”(放し飼いにする。この“先行き不透明な”消費社会、文化的混乱社会に無制限に解き放って、市場の対象とし、一方で常に代替え可能な労働力として活用し、中にバイタリティあるものがいたらこれまでとは違った“エリート”としてちやほやする、やはりそこでも競争をねらっているように思うのです——ただ、私は誰かがこういったことをねらっていても、若者はたくましく生きているのではないかと考えていますが——)ではないでしょうか。本当には子どもたちにゆとりを与え、それをゆだねようとはしていないと思います。

ここでも、若干の論の展開が必要な感じがしています。“子どもにゆだねる”とは何でしょうか。大人の教育を放棄することでしょうか。私はそうではないと最近思っています。“子どもにゆだねる”とはある意味では大人が為し得るもっとも高度な教育ではないでしょうか。ゆだねるからこそ、大人との対話が出てくるように思うのですが、いかがでしょうか。

## 3. “フリースクール”に目を向けたい

今年の正月は、いろいろ驚きました。先の寺脇氏の著書にも“へー!”と思ったものです。もう一つは、『Free at Last』(訳本名『超学校』。それなりに表そうとしていることはわかるのですが、若干の違和感があります。原題そのものでよい感じがしました。どこまでも自由に、といった意味でしょうか)という本です。1968年にアメリカで開校した「サドベリー・バレー校」は時間割が無いというのです。生徒が何人

か集まってスタッフ（教師）のところにいて学習内容や時間帯を契約して初めて授業が成立するというのです。また、学校内の事柄は、週一回開かれる全校集会で審議されるという（スタッフも生徒と同じ1票のみ）。原型はニールのサマーヒルのフリースクールにあるようですが、私自身はそれを詳しく知らないのです、このサドベリー・バレー校には驚かされたわけです（急速、勉強を始めています）。もっとも、この訳本のすべてを鵜呑みにしたわけではありません。不登校の子は全くいないのだろうか。情緒障害などあり得ないのだろうか。暴力沙汰は、いじめは、とこの日本にいる者としては、知りたいことが山ほどあります。でも、これだけは、決して日本では当面実現しないだろうな、と思ったのは、このようなカリキュラムもない学校（4歳から高卒までの子どもが生活している）の卒業生が、大学に受け入れられていることです。

これだけでは、図書紹介に終わってしまいます。このサドベリー・バレー校にひきつけられたのは、訳本の最後にインターネットのホームページが記載されていたことです。そこにアクセスできるなら、先に書いたような疑問もすぐ問い合わせることができるかもしれない。とすると、これまで書物は書物としてしか見ていなかったことが違う展開となるかもしれないと思ったのです。早速、アクセスしてみました。つながりました。訳本には無い情報が多々あります。同種の教育を目指している学校にもリンクが張られています。サマーヒルのフリースクールのホームページもありました。（先の疑問はまだ問い合わせさせてい

んが、いずれ挑戦したいと思っています。）

教育改革は、現実には根ざさなければなりません。目の前の子ども、父母、地域に。でも、すぐに実現できないとしても、“学校”像を描きながら、その中の何ができるかを問いかけながら進まないと先へは行かないように思います。そういった意味で『Free at Last』は一つの手ずりとなるように思いました。

#### 4. 手労研は何を求めてきたか

学校五日制が教育改革の入り口となるということは、このように「ゆとり」を手がかりに、子どもたちに真にゆだねることに関心することではないでしょうか。手労研の課題と関連させてみるなら、私たちは子どもたちが遊びや手の労働に興味関心を示し、そこに驚きや発見をするだろうという想いをもってすすめてきました。もちろん、子どもの中から自然発生的にでてくるなどといった甘い考えはもっていません。材料の提供が無ければ、子どもたちが関心を示す場がなければ、子どもの意欲も生まれないだろうと考えてきました。この間には紆余曲折もありましたが、手労研がある程度確立させてきた、“待つ”という言葉は、それを表しているように思います。私たちのできる材料は可能な限り提供しながらも、やはり、子ども自身が求めることを“待つ”、ことに至ったのではないのでしょうか。

でも、学校で本当にそれができるだろうか、という疑問はでてきます。そのとき、まだまだ、鵜呑みにはできませんけど、『Free at last』を思い描くのも悪くはないのではないのでしょうか。（こんなことを考

えていたら、和光高校はすでにおもしろいことを数年前からしていました。3年生の三学期は正規の授業はやっていません。でも、自主講座として、生徒が集まって要望し、担当してほしい教師のところによって了解が得られるとその授業が成立するので。今年も十数講座が開設されています。きわめて限定されていますが、サドベリー・バレー校の授業の成立と同じ手順です。ですから、部分的にはこの日本でも不可能ではないのです。

## 5. 自分の足下（地域）を大事にしたい

今一つ、手労研の課題と結びつけて考えなければならないのが、地域の問題だと思います。私は自分自身について時々考えるのですが、なぜ、手作りとか手の労働だとかに関心を持ってきたのかと。振り返ってみると、自然科学（いわゆる西洋的合理主義に通じる）を学んできたことにおもしろさを感じつつも、言ってみれば泥臭いものにも同時に惹かれていたように思います。それが、科学教育や技術教育を専門としつつ、その関係の研究会とは別に手労研をやってみたいと思ったのだと思います。これを、今整理してみると、地域——そこに生活する人々が固有に作り上げてきたものを抱えている——（イワン・イリッチは土着的といった言葉を使っています）への漠然としたこだわりだったように思います。これは私の感じているところですが、一般的には地域の固有の文化というものでしょう。学校五日制がいうところの地域はこのような意味での地域でなければいけないのではないのでしょうか。そうしたときに、手労研が求めてきたことはまさにそのもので

あるわけです。

さて、最後になりますが、土着的なものを求めつつも、グローバルな課題に常に直面している子どもたち、私たちは、コミュニケーションをはかることによって、中教審の枠組みを超えることができるように思います。そのときに、インターネットも有効な方法であることも確かめながらいきたいと思っています。（ちなみに、いざ書こうとしたら中教審の審議のまとめはあったのですが、答申本文が手元にありませんでした。それも、インターネットですぐに引き出すことができました。また、先のサドベリー・バレー校は様々な文献を発行しています。中でも、すごいなと思ったのは、全校集会の会議録を週刊？で発行していて、その購読も可能なのです。先の訳本によれば、これらの文献を出版しているのも生徒が関わって校内につくられた出版部のようなようです。あまり、英語は得意ではありませんが、会議録も含めてインターネットで注文をしました。確認を求めるメールが入りましたので早速到着するでしょう。おもしろい内容があったら、紹介したいなと思っています。）

主題に沿わない部分もあったかもしれませんが、十分な展開はできていませんが、若干なりとも問題提起になればなと思っています。昨年は、和光中学校でこの4月からの完全五日制実施に向けて生徒・父母との論議を時間をかけて取り組んできました。その中で感じてきたこともこの小文に反映していると思います。機会があればその実践も報告したいと思っています。